帯北 準決勝 札大谷に 0－1 全国逃す

全道高体連 サッカー

（17、18日・小樽市望洋サッカー・ラグビー場、後志管内赤井川村キロロリゾートサッカーコート）

最終日の18日午前は男子の準決勝を行い、帯北は全国高校総体（インターハイ、8月14～22日・福井県）の道代表を懸けて前年度の全国選手権道代表の札幌大谷と対戦したが0－1で惜敗し、2014年以来7年ぶり6度目の全国出場を逃した。帯北は開始直後、前線から激しいプレスをかけ序盤は互角の展開だったが、15分すぎに先制点を許した。後半も積極的にゴールを狙ったが、あと一歩届かなかった。同日午後から男女の決勝を行う。インターハイは男子の優勝と準優勝校、女子は優勝校が道代表権を獲得する。

17日は男子の準々決勝、女子の準決勝を行った。男子の帯北は2－2の引き分けのまま延長でも決着がつかず、PK戦（5－4）で函館大谷を下し、17年以来4年ぶりの4強進出を決めた。（有岡志信、金野和彦）

【男子】◇準々決勝（関係分）

帯北 2（0－0、1－1）延長 2 函館大谷（1－0、0－1）（PK5－4）

▽得点【帯】①相澤（前半10分）②榎本（延長前半5分）【函】①竹原（後半14分）②木下（延長前半3分）

【準々決勝・帯北―札幌大谷】前半終了間際、帯北のFW榎本圭真（オレンジ色ユニホーム、左）がロングシュートを放つ

【準々決勝・帯北―函館大谷】前半10分、帯北のMF相澤匠（オレンジ色ユニホーム）のシュートが一度、相手のディフェンスにブロックされるも自らボールを拾い、再びシュートを打ち先制ゴールを決める

「チームファースト」掲げ進化

準々決勝 函館大谷戦

帯北のMF上田岬主将（3年）が約10秒間、動きを止めて集中力を高めた。函館大谷が1本外し、決めれば勝利が決まる5人目のPK戦のキッカー。長い沈黙と静寂がピッチを包み、右足で放った勝利の軌跡がゴール左へ吸い込まれた。その瞬間、勝利の歓声が大きく響いた。

「チームファーストを掲げ、まとめるのが大変だった。でも、苦しい試合は経験しているので」。最後の一発を決めた上田に、全員が駆け寄り、チームで勝利を祝った。頭をなでられ、上田も笑いながらやり返した。やっぱり、このチームは仲良しだ。

前半10分に先制したのは帯北だった。ゴールライン際の角度のない位置から、MF相澤匠（3年）が決めた技ありのゴール。だが、この直後から、戦術の方向性をめぐって、攻撃と守備陣がピッチ内で激論を交わしていた。このままビルドアップして攻めるか、安定するまで守備をするか―。

2017年に片桐聡監督が就任後、選手の自主性を重んじて選手でメンバーを選考、練習内容も決めている。悩んだ時に助言するのが指導者というスタイルだ。相澤は「後ろから『FWがもっと守備をしろ』と声があった。言い返していたが、ハーフタイムで意見が一致できた」と言う。

開始10分はシンプルに、前線からしっかり守備をすることに統一。後半14分に左サイドからのクロスで失点し、同点にされた。延長前半3分に逆転されたが、2分後にはFW榎本圭真（3年）の今大会2試合連続弾で追いついた。

コロナ禍が続き、今季は5項目に分類した「チームファースト・マインド」を掲げた。①先発組②控え組③ベンチ組④サポート組⑤遠征外の強化組―の役割を確認。だからこそ、練習中でも選手間の激論も増えた。「役割をきっちり認識させ、やるべきことが明確になった。もちろん、最終的な責任は監督が取る」。片桐監督は〝化学反応〟で進化するチームを頼もしく感じた。

監督就任後の4年間、チームは選手権も含めて全国舞台から遠ざかっている。そんな現状に上田が力強く言い切った。「札幌大谷に勝つイメージがある」。今季の帯北は外面も内面も、一回り大きく成長している。

「チームのため」榎本同点ゴール

○…準々決勝で、FW榎本圭真が「チームファースト」を具現する延長前半の同点ゴールを見せた。身長182センチの体格を生かし、チームの攻撃を統制。強い意気込みを見せた。

胸に刻んでいるのは、昨年10月の全国選手権道予選。右足首の靱帯（じんたい）を損傷して、チームは3回戦で1－2で旭川実に惜敗した。だからこそ、榎本は「チームのみんなに迷惑をかけた。点を取って返すしかない」と最後まで走ってゴールを目指す姿勢を崩さない。

5月の全道高体連十勝支部予選でも、今回と同じような状況だった。後半に榎本のゴールで追いつき、PK戦で帯大谷を下し、10連覇の偉業を成し遂げた。

【準々決勝・帯北―函館大谷】PK戦で最後のキッカーとしてシュートを決めた帯北のMF上田岬主将（右手前）。準決勝進出が決まり、イレブンは上田に駆け寄り喜んだ

◇帯北の2014年インターハイ出場後の全道高体連大会の成績

▽15年・準決勝　帯北1－4旭川実
▽16年・1回戦　帯北0－5札幌大谷
▽17年・準決勝　帯北1－2道大谷室蘭
▽18年・2回戦　帯北1－1札幌創成（PK3－5）
▽19年・1回戦　帯北1－3駒大苫小牧
▽20年・コロナ禍で大会中止

かちまいスポーツ
記録の速報は▶kachimai.mobi
写真がほしい▶0120-25-9410
Eメール▶sports@kachimai.co.jp
ファクス▶0155-25-2700

池田・岩間 北北海道 3位

帯大谷 全国届かずも地力発揮

【男子個人戦北北海道・準決勝】ネット際のシャトルに鋭く反応する岩間琉哉（右）。池田侑輝とのペアで全国高校選抜大会に続く大舞台へあと一歩だった

バドミントン

（17日・よつ葉アリーナ十勝）

第2日は男女の個人戦ダブルスなどを行った。北北海道の男子は、全国高校総体（インターハイ、8月8～13日・富山）の出場権の懸かった準決勝で、池田侑輝・岩間琉哉組（帯大谷3年）が伊藤彰悟・佐々木颯太組（旭川実2年）に1－2で惜敗した。関根一誠・及川令穏組（帯工3年）、宇佐見慧・宇佐見慈組（帯大谷同）は準々決勝でいずれもファイナルゲームの末に敗れ8強。女子は上野稜佳・佐藤柚夕組（同同）と藤野屋香凜・濱下亜美組（同3年・2年）のベスト8が十勝勢最高位だった。帯一中出の澤沼音里（旭川実3年）は志摩紗希（同）と組み3位に入ったが、インターハイには届かなかった＝記録は後日掲載。（北雅貴、新井拓海、塩原真）

個人戦ダブルスの優勝は、北北海道男子は太田蓮・菊地陸哉組（旭川実3年）、女子は川等花菜・高橋あかり組（同同）。南北海道は男子が西根寛弥・高山悠大組（札幌龍谷同）、女子は小原陽夏・平元さや組（とわの森三愛同）だった。団体戦の北北海道と南北海道の優勝校同士が戦う全道決勝も実施され、男子は札幌龍谷が旭川実に、女子はとわの森三愛が旭川実にいずれも3－1で破り、南北海道勢が制した。

全国切符まであと一歩だった。池田侑輝・岩間琉哉組は準決勝で最後まで気迫あふれるプレー。ファイナルゲームの熱戦を演じたが、わずかに届かなかった。

前日の団体戦の決勝で敗れた相手との再戦。「借りを返す」（岩間）と気合十分で臨んだ。第1ゲームは中盤以降にリズムをつかんだ。池田が後衛から強烈なスマッシュを放ち、浅くなった返球を前衛の岩間がたくパターンや、池田のロングサーブが決まるなど主導権を握り、幸先良く21―14で奪った。

第2ゲームは相手のドライブなど速い展開に持ち込まれるなど9―16と苦戦を強いられていたところで、岩間が鼻血のアクシデント。数分間の治療の間に気持ちを切り替えて猛反撃し、追い詰めた。19―21で落とすと、ファイナルゲームも終盤に速く低いドライブで突き放され17―21に。前日よりも接戦となったが、池田は「最後まで攻め切れず、守りに入ってしまった」と落胆を隠せなかった。

右利きの池田と左利きの岩間は昨年から組んだ。岩間は特にこの数カ月間、ダブルスの練習に力を注いだ。池田がシングルスのメニューに取り組んでいる時間も、別の選手と組み強化。コート全体を動かせる脚力と前衛でのタッチが格段に良くなり、ペアとしての完成度も高まった。

3月の全国高校選抜大会に出場し、貴重な経験を得た。ペアとして大舞台での再チャレンジはかなわなかったが、全道の舞台で地力は見せた。

【男子個人戦北北海道・準々決勝】旭川実の強敵相手にファイナルゲームにもつれ込む接戦を演じた帯工の（右から）関根一誠と及川令穏

「経験を今後に」宇佐見慧・慈組

○…「大谷の代表として勝ち切りたかった」。準々決勝で思わぬ敗戦を喫した宇佐見慧は悔しがった。

旭川実の第3ダブルスと対戦。第1ゲームは持ち味の攻撃力を生かし、序盤から双子の弟の慈と躍動した。常にリードを保ち21―18ともものにした。

第2ゲーム以降は、相手もスマッシュを簡単に打たせないように短いハーフ球を交ぜ変化を付けた。逆転負けを喫し、慈は「自分たちはアタックが強いが、押し切れなかった時の対処法を身に付けられなかった。どのように得点するかもっと突き詰めればよかった」と唇をかんだ。

競技は高校で一区切り。前日の団体戦でチームは敗れたが、個人的には勝利した太田蓮・菊地陸哉組（旭川実3年）が優勝しただけにもどかしさは感じたものの、2人は「バドミントンで学んだことを今後に生かしたい」と口をそろえた。

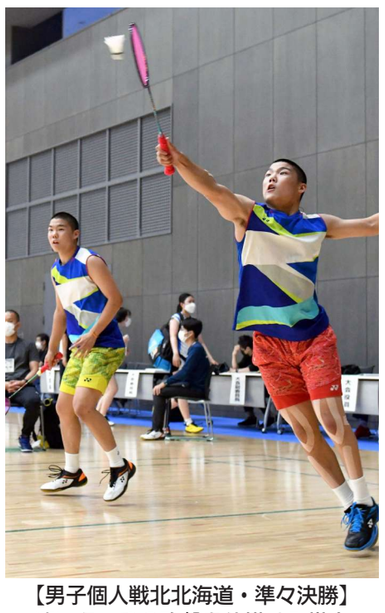
「持てる力出た」関根・及川組

○…関根一誠・及川令穏組が準々決勝で善戦した。

前日の団体戦で敗れた相手と再び対戦。ドライブ戦に持ち込ませないように、コートを大きく使うラリーで揺さぶり、好機でネット前に詰めた。ファイナルゲームはマッチポイントを握られてから、及川と関根のそれぞれのスマッシュなどで3連続得点しジュースに持ち込んだ。関根は「あと少しだっただけに余計に悔しいが、持てる力は出せた」と話した。

小学生時に帯広ジュニアで3年間ダブルスを組み、別々の中学を経て、高校でペアを再結成。中学1年で右足首を手術した経験を持つ及川は、帯工で関根と共にリーダー的役割を担った。「引っ張っていく力は付いたかな」と、振り返った。

2人とも建設関係の就職を希望。働きながら地域の社会人大会に出場する可能性はあるが、本格的な競技からは引退するつもりだ。



【男子個人戦北北海道・準々決勝】速いタッチの攻撃を仕掛ける帯大谷の（右から）宇佐見慧・宇佐見慈組。第1ゲームは持ち味の攻撃力が光った